
電話機と目玉焼き

+ 神風 +

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電話機と目玉焼き

【Nコード】

N8583B

【作者名】

+ 神風 +

【あらすじ】

毎朝かかってくる、メリーさんからのモーニングコール。ある日主人公は、彼女に「これで199回目か。ご苦労さん。どうせなら200回目突破の前に跡形もなく消えてくれないか？」と言った。すると彼女は拗ねて、彼に悪戯をする。その悪戯にイライラする主人公がいった言葉は？そしてメリーさんの正体は？しんみり系の話です。

プルルルルルルル……プルルルルルルル……ガチャ
『おはようございます。私メリーさガチャ……ツァ……ツァ……
ツァ』

今回で198回目となる、自称メリーさんからの電話だ。
毎朝律儀に午前6時に掛けてくる。お陰で最近は、目覚ましを使
っていない。お役御免なので、この前のゴミの日に捨ててきた。

上京したときに母さんから貰ったものだが、別に形見という訳で
もない。何の迷いもなく捨ててしまった。

プルルルルルルル……プルルルルルルル……

また掛かってきた。多分出なきや仕事から帰って来るまで鳴りつ
放しだろう。隣の部屋のおばさんの迷惑になる。出なきやいけない。
プルルルルルルル……ガチャ

『あー！！何でさつきは切ったんですか！！？？せっかく私がも
ーにんぐこーるしてあげたのに！！』

モーニングコールの発音が、かなり怪しい。

「頼んでない。よく毎朝毎朝かけてきて……お前ヒマなのか？」

『はうっ！！そんなことは……』

怯んだな。凶星か。

『そ、そおいえば、今回で私からの電話は、何回目になったでしょ
う！？』

無理な展開だ。そんなに俺と話したいのか。

だが残念だな。俺はお前と話している暇はない。おととい来やが
れ。

「これで199回目か。ご苦労さん。どうせなら200回目突破の
前に跡形もなく消えてくれないか？」

『ひ、ヒドイです！！こうなったら……覚悟してくださいよッ！！
』！

ブツツ……ツ……ツ……ツ
切れた。さて、朝ご飯でも作るか。今日は目玉焼きとインスタント焼きそばだ。

そして、だ。

朝から俺の携帯は鳴りつ放しなのである。電源は切った。バッテリーも抜いた。なぜ着信する？

画面を見ると、そこには「めりーさん」という文字が表記されている。

アイツ、いつ俺の携帯に登録を……。

このままじゃ仕事に集中できない。しかも、午後からは取引先に出向かなきゃいけない。それまでにこれを、何とかしなければ。

仕方ない。これは出て、一発ガツンと言ってやるしかないな。

俺は部屋を出て、屋上へ向かった。

エレベーターを待っている暇はない。駆け足で階段を上る。

屋上についた。誰もいない。

俺は備え付けのベンチに座り、携帯を取った。

『はっは……困ったでしょ？ やめて欲しかったら謝ってくださいね』

携帯の向こうから、鼻歌が聞こえる。

「なんで俺が謝らなくちゃならん？」

理不尽だろ。どう考えても。

相手は鼻歌を歌い、俺の返答には答えない。

俺は無意識に貧乏ゆすりをしていた。

「おい、無視すんじゃないやねえ。俺が謝る理由は、一つもないぞ」

俺の声は、屋上に空しく響く。

時間だけが過ぎていく。貧乏ゆすりは、最初の時より大きくなっていた。

『うふふふふ……。困ってますね。私の怖さがわかりましたか？』

「はあ？」

『だから、謝れば、許してあげますよ』

こいつは、俺の話聞いていないのか？

「だから、俺が謝る必要はないだろ」

『なーにムキになっちゃてるんですか？まだまだ子供ですね』

ガタン。

俺は立ち上がった。もう限界だ。

「謝れば、もう二度と掛けて来ないか？」

俺の声は低かった。

『……え？』

一瞬間があつて、聞こえてきた声はそれだけ。

「わかった。全て謝ろう。俺が悪かった。許せ」

『え、え？』

「だから、もう二度と掛けてくるな」

『そ、そんな！ちよつとまガチャ……。ツ……。ツ……。ツ……。』

ふう、と溜息をつき、そして屋上から出ようとした。

「ち、ちよつと待って下さい！！！」

「なっ！？」

ビククリした。俺の背後から聞こえてきた声の主、それは……

「初めまして……。メリーです」

「へへ……。こんな初登場、本当はしたくなかったんですけどね……」

……
と言つて、メリーは顔を俯ける。

彼女の漆黒の長いストレートヘアを、風が巻き上げた。白いワン

ピースに愛嬌のある顔が、可憐という言葉を連想させた。

「ごめんなさい……。最初はちよつとでも話してくれたのに、段々話してくれなくなったので……。寂しくて……」

と擦れた声で言うと、顔を上げ、痛さを堪えるような笑みを浮かべた。

「私って、生前、お父さんからもお母さんから、誰からも相手にしてもらえなくて……」

彼女は自分の平たい胸の上に、自らの手を当てた。

「辛くて、マンションから飛び降りて、死にました。たしか、14歳のときだったと思います……」

メリーは、最初のときより顔を俯かせた。前髪で表情は見えないが、想像はついた。

泣いている。

「死んで……で、何時の間にか、私はメリーになっていました」

握り締めている拳が、微かに震えていた。痛々しかった。抱きしめて、慰めてやりたかった。

「手には受話器が握られていて、それに耳を当てると、勝手にあなたところに繋がってしまいました。何故だか、私にもわかりません……」

でも、と言い、彼女は顔を上げた。

その顔は予想通り、涙に濡れていた。でも、その顔で必死に笑った。

「あなたの声は、優しくかった……。凄く凄く……。温かかった……。ぶっきらぼうな感じがしたけど、私のこと、無視しないでくれて……。それだけで、それだけで私は凄く、凄く嬉しかったです」

「ごしごと、彼女は涙を拭った。強く拭き過ぎたのか、頬が少し赤くなっていた。

その時だった。俺は彼女の体が一瞬、透けたように見えた。瞬き

をすると、それはもう消えていた。

だが、確かに彼女は透けていたのだ。14歳の少女は、また話し出した。

「今、透けましたよね。メリーって、一度だけ、たった一度だけですけれども、相手の人の前に、姿を現すことができるんです。でも、それは最初で最後。10分すると消えてなくなり、私も同時に、どこかへ消えてしまっんです」

「んなバカな……」

口の中がカラカラだった。

彼女は俺の言葉を聞き、ふふ、と微笑んだ。

「実体化するには、一応条件が必要なんです。二つあるんですが、そのどちらかが満たされれば、実体化するんです。一つ目は、メリー自体の意思」

そして、と言って、メリーは息を吸った。

「二つ目は、もう二度と掛けてくるな、という言葉」

『わかった。全て謝ろう。俺が悪かった。許せ』

『え、え？』

『だから、もう二度と掛けてくるな』

俺は、俺はこの心のない一言で、メリーを実体化させる二つ目の条件をクリアしてしまったのだ。そのせいで彼女はもう……。

彼女の体が透け始めた。後ろのベンチや金網、そして変わらぬ街の風景が見えた。

「ちよつと待ってくれ!!!」

俺は叫んだ。メリーが、ちよつと驚いた顔をする。

「何だ？お前は無理矢理実体化させられちまった上に、消えちまうのか！？俺のせいだ!？」

自分でも、何と言っているかわからなかった。ただ、彼女……メ

リーに消えて欲しくないということ。その思いが自分の中にしつかりとある、それだけがわかることだった。

「どう、どうすれば消えない!? 謝ればいいか!? 土下座してもいい!」

俺は必死に訊いた。でも彼女は、静かに微笑んでいた。そしてその目の端から、雫が零れ落ちた。

俺は、何も言えなくなった。

メリーは口を開いた。とても聞き取りにくい声だったが、俺には全部、はつきりと聞こえた。

「うれしいです……。やつぱり、いい人なんです。私の、思った通りでした。優しく、温かくて……。でもぶっきらぼうで……。私の受話器が、あなたのところへ繋がっていたのも、きっとあなたなら、私を救ってくれるって思った神様のお考えなんでしょうね」

俺は、首を横に振る。

「違う!! 俺はお前を救えなかった……。!! お前が辛いことたくさん抱えてるのに、全く気付けなかった……。!!」

頬が冷たい。俺の目からも、涙が出ていたようだった。

メリーは、さっきよりもっと透けていた。床のコンクリートの色も見える。その姿のまま、彼女は俺に近づいてきた。

そして、俺に抱きついてきた。ふわりと。まるで羽根だった。

柔らかい香りがした。

「……私の本名は、久川瑛美ひさかわえいみといいます」

抱きついたまま、彼女は言った。俺の胸の辺りに収まる彼女に、

俺はどう言葉を掛ければいいのだろう。

「あなたの……、名前は？」

「暁……白川しらかわ暁だ」

「そう……いい名前……」

彼女は、もうほとんど見えなくなっていた。

俺は、彼女を強く抱きしめた。

「瑛美。辛かった。苦しかった。でも、もう心配しなくて

いいからな。お前は、もう自由だ。すべての拘束から、今、解放されたんだよ」

俺がそう言っていると、彼女は顔を上げた。そして、笑った。

彼女は、消えた。

俺の、目覚し時計に起こされる日々が戻って来た。

毎日かかってくるモーニングコールも、それを無視するとかかってくる抗議の電話も、もうかかってこなくなつた。

いつもの、変わらない日常。

目覚し時計は、母さんがくれたものを使っている。

確かに捨てたはずなのに、机の上に置いてあつたのだ。その机には、電話機が置いてある。犯人はすぐわかつた。

「さて、今日も目玉焼きと、インスタント焼きそばかな」

俺は簡易キッチンに向かい、フライパンとやかんを用意する。

7時になつたら出勤だ、急がなければ。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8583b/>

電話機と目玉焼き

2010年11月28日05時50分発行